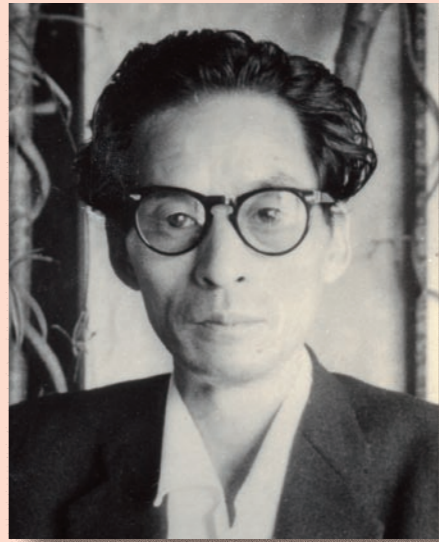


俳句

たかはしひょうひょうし

高橋飄々子

防府市
(1915~1963)



【著作】
句集『嵐（飄々子遺句抄）』
（昭和39・高橋飄々子遺句抄刊行会）

高橋飄々子は、戦後の山口県俳壇の復興に精力的に取り組み、大きな足跡を残した一人である。
大正四年（一九一五）三月十四日、佐波郡防府町三田尻村中自力（現・防府市自力町）に生まれる。本名・孝太郎。小学校卒業後上京し、中学へ進学したが中退、帰郷した。
昭和十六年（一九四一）の冬、防府で又田竹栖らと「鞠生句会」を結成し、句作を始める。昭和十九年（一九四四）に応召して中国に渡ったが、まもなく病に倒れて内地送還となる。広島陸軍病院で療養中の同年十二月、ホトトギス派の本田一杉に師事するようになった。

終戦直後の昭和二十年（一九四五）十一月、防府の自宅に同人を集め、又田竹栖らと俳誌「ちかや」を創刊したが、昭和二十三年（一九四八）に廃刊。しかし、直後の同年十月には俳誌『嵐』を創刊する。胸を病み、入院を繰り返す闘病生活の中にあつて、「リアリズムとロマンチズムの統一の上に立つ象徴俳句の希求」を主張し続けた。その間、昭和三十一年（一九五六）の山口県俳句作家協会の創立に尽力し、第二号・三号『山口県俳句年鑑』の編集・発行にも携わるなど、県俳壇の振興に献身的な貢献をした。

昭和三十八年（一九六三）七月三日永眠。享年四十八歳。句友の有馬草々子が書いたとおり、まさしく「俳句の鬼」として燃え尽きた人生であった。

県俳壇に新風を送り続けた俳誌『嵐』は、昭和三十八年（一九六三）九月、同人等が飄々子追悼号を出して廃刊になった。終刊号の編集発行人は田村緋沙子。没後一周忌の昭和三十九年（一九六四）七月三日、妻の俳人高橋ちちり等によって、遺句抄『嵐』が出版された。

（文・森川信夫）



俳誌『嵐』（左）と句集『嵐』（右）



筆跡（句集『嵐』より）

高橋飄々子 年譜

| | |
|-------------|-------------|
| 大正4（一九一五年） | 昭和16（一九四一年） |
| 昭和16（一九四一年） | 昭和19（一九四四年） |
| 昭和19（一九四四年） | 昭和20（一九四五年） |
| 昭和20（一九四五年） | 昭和23（一九四八年） |
| 昭和23（一九四八年） | 昭和31（一九五六年） |
| 昭和31（一九五六年） | 昭和34（一九五九年） |
| 昭和34（一九五九年） | 昭和35（一九六〇年） |
| 昭和35（一九六〇年） | 昭和38（一九六三年） |
| 昭和38（一九六三年） | 昭和38（一九六三年） |
| 昭和38（一九六三年） | 昭和39（一九六四年） |
| 昭和39（一九六四年） | 昭和44（一九六九年） |
| 昭和44（一九六九年） | 平成6（一九九四年） |

3月14日、佐波郡防府町三田尻村中自力（現・防府市自力町）に生まれる。本名・孝太郎。
冬、又田竹栖らと「鞠生句会」創設。
12月、広島陸軍病院で療養中、ホトトギス派の本田一杉に師事。
10月、三田尻村中自力の自宅に「ちかや発行所」の看板を掲げる。
11月、又田竹栖らと俳句雑誌「ちかや」を創刊。同月、結婚。妻は俳人、高橋ちちり。
4月、飄々子の主唱により、防府天満宮大専坊において山口県俳句大会を開催。俳句雑誌「ちかや」終刊。10月、俳句雑誌『嵐』を創刊。
7月、山口県俳句作家協会（懇話会）を設立。
4月、『山口県俳句年鑑』第2号刊行。
『山口県俳句年鑑』第3号刊行。
7月3日、逝去。

《没後》

9月、俳句雑誌『嵐』終刊。（通巻65号）
7月3日、一周忌の命日、句集『嵐（飄々子遺句抄）』が、高橋飄々子遺句抄刊行会から出版される。
7月6日、佐伯虎杖・粟屋澄夫ら同門の俳人たちが発起人となって、桑山公園に句碑が建てられ、除幕式が行われる。
「草の絮 さず負い のぼる 天の凹み 飄々子」
10月20日、高橋飄々子句碑墨直し25回記念の『献句集』（高橋ちちり）刊行。

日輪のひかりよこるる穴まどい
霧の夜の林檎の黄なるとこ愛し
枯野ゆく自転車の輪の音がある
寒月光ただれし胃壁水を欲る
腰の骨板のごとなり春炬燵
風船に貌書き与え冬空へ
人の穢の泡立つ春野傾く海
熱下る血よりも濃ゆき苺喰つ

（句集『嵐』へ昭和39年・高橋飄々子遺句抄刊行会刊）より抜粋



草の絮 さず負い のぼる 天の凹み 飄々子

上の句碑は、桑山公園の護国神社裏手にある遊歩道に登ったところの右側にある。除幕式は昭和四十四年七月六日に行われた。発起人は佐伯虎杖・粟屋澄夫ら同門の俳人たち。飄々子七回忌に建てられた。彫られた文字は、故人のペン書き自筆筆跡を拡大したものである。

（提供・森川信夫）